

共同研究「戦後日本におけるセクシュアリティと親密性の再編」 特別セミナー(1)

日時: 2010年11月28日(日)

15時~17時

場所: 京都大学文学研究科新館5階
社会学共同研究室

「ホモ」の普及 石田仁

* 要旨

「あの人はホモなんだって」「ホモは美にうるさい」という表現を、私たちは(是非はさておき、)文法的に不自然さはないと考える。つまり「ホモ」という語は、単独で主語を説明できる言葉であり、時には主語そのものになれる言葉であるとみなしている。また、こうした使われ方は、「ホモ」という語の登場以来、ずっと変わっていないと思われるふしもある。しかしそうした現在にみられるような「ホモ」の使われ方は、意外と遅いようである。ある時期までは「ホモの味は覚えるとやめられない」とか「彼にはホモ傾向がある」といった表現にみられるように、「ホモ」は単独で名詞になれなかった。本報告では、戦後の一般雑誌の内容分析・言説分析を通して、次のことを明らかにする予定である。(1)自律した名詞「ホモ」という表現は日本社会でいつから普及したのか、(2)この表現の普及は何を下敷きとしたのか、(3)この表現の普及はどんなイメージを形成したのか。以上3点を解明しつつ、戦後日本のセクシュアリティ観を描き出す。

お問い合わせ
(GCOE事務局)
075-753-2734
<http://www.gcoe-intimacy.jp/>

* 講師プロフィール

聖マリアンナ医科大学非常勤講師。博士(社会学)。
編著に『性同一性障害』(御茶の水書房)、
共著に『ジェンダーと社会理論』(有斐閣)など。